

「当麻曼荼羅縁起絵巻」(光明寺蔵)の構成と特徴

—建築描写の再検討を通じて—

野中 愛理 (東京国立博物館)

奈良の当麻寺に伝わる「綴織当麻曼荼羅」(八世紀)の織成を物語る縁起は、はやくは十二世紀末の『建久御巡礼記』(建久二年〈一一九一〉)にみえ、十三世紀に入り浄土宗西山派の派祖・証空の精力的な喧伝による曼荼羅信仰の隆盛に伴い、内容が増補され、やがて継子譚を伴う中将姫説話へと発展する。「当麻曼荼羅縁起絵巻」(神奈川・光明寺蔵)は、十三世紀に遡る現存最古の絵画作例である。各巻詞書と絵が三段からなる上下二巻では、冒頭で当麻寺の創建に触れられたのち、横佩大臣の娘(本願尼)が出家し、化尼らの助力のもと織られた曼荼羅を拝し、後年往生するまでが語られる。本発表では光明寺本について、詞書と絵の双方から建築描写を再検討する。

まず、下巻第二・三段の建築が同一であると指摘する先行研究を受け、本発表では上巻第二段にある建物についても、高欄や雨落溝、亀腹などの細部の要素が共通することから、同じ建物であることを明らかにする。また、画中画に繰り返し描かれる海波文は、最終段の来迎場面における水景を予告する役割を果たすとの先学による指摘があるが、発表者は建築描写の反復にも同様の機能を指摘したい。すなわち、同一図像を繰り返すことによって、本願尼の発願、曼荼羅の感得、往生の過程が一貫した流れの物語として演出されていると解釈する。絵巻における建築の反復描写については、「信貴山縁起絵巻」(奈良・朝護孫子寺蔵)や「粉河寺縁起絵巻」(和歌山・粉河寺蔵)にみられる固定した一つの視点にて一つの建物を描く表現から、「一遍聖絵」(神奈川・清浄光寺蔵)にみえるような異なる複数の角度から捉える描写へと展開過程を辿ることができる。光明寺本は、角度を変えることで建物の表現に変化をもたせながら、画中画ともあわせて反復させ、一つの物語を構成している点に特徴があるといえよう。

次に、「当麻曼荼羅縁起絵」(当麻寺、二幅、十四世紀)や「当麻寺縁起絵巻」(当麻寺、三巻、享祿四年〈一五三一〉)にみえる当麻寺の描写と比較し、高欄や石階の表現から、光明寺本上巻第二段、下巻第二・三段の建物が当麻寺を描いたものであることを示す。いっぽう、曼荼羅織成の場面を描く下巻第一段については、詞書にある「堂のいぬみのすみ(乾の隅)」に着目し、現在の当麻寺の曼荼羅堂北西に位置し、十三世紀半ばに増築された閼伽棚である可能性を述べる。近年の光明寺本研究においては、光明寺本の詞書には在地性の希薄化が指摘されてきたが、本発表での考察を踏まえると、むしろ画面においては当麻寺の在地性が描出されているといえる。

以上、光明寺本の建築描写における分析を通じて、この絵巻における詞書と絵の緊密な連携についても明らかになろう。